

2019年12月21日（土）降誕祭前晩祈祷説教

『キリストは生まれた』

「光は暗闇の中で輝いている。闇はこれに勝たなかった。」（ヨハネ1：5 口語訳）

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

（ヨハネ1：14 新共同訳）

①【キリストは生まれた】

今年の冬至は明日12月22日（日）です。冬至というのは最も夜が長くなる日です。昔は冬至の日は「死に一番近い日」と言われていましたので、さまざまな厄払いをするためのお祭りをして健康のために祈りました。カボチャを食べたり、ゆずのお風呂に入ったりするのも健康のことを考えたからです。古代ローマでも太陽が力を失い、夜が最も長くなるこの時期に、太陽神アポロの祭りが開かれていました。ローマでキリスト教が国教になった時、その祭りをイエス様の誕生日を祝う祭りにすり替えたのです。この冬至の日を境に、昼がだんだんと長くなってゆきます。この冬至の日は、いわば分岐点なのです。私たちキリスト教徒にとっては、キリストがこの世に来られたその日から、死と呪いと裁きと崩壊は終わり、命と祝福と赦しと新しい創造が始まってゆくのです。

大阪YWCAシャロン千里のクリスマス会に行って来ました。ほとんどの方はクリスチャンではありません。入居者の方もいますし、いろんな方が参加されていました。そこでハンドベルコンサートを聞き、賛美をたくさんいたしました。あらためて讚美歌というのはすごいなあと感じました。聖書の物語をストレートに、はっきりと語っているからです。

讚美歌21の262番「聞け、天使の歌」というのがあります。2番「み子キリストこそ、永遠にいます主。神の時満ちて、おとめに宿り、人となりたる、神のみことば。インマヌエルの主、今宵生まれぬ。聞け、喜びのおとずれの歌。」3番「光をもたらす、義の太陽よ。救いといのちと、平和の君よ。死すべき人を、生かすためにと、み子は生まれぬ、まぶねの中に。聞け、喜びのおとずれの歌。」「オーホーリーナイト」という聖歌は「清らに星すむ今宵、神の子生まれましぬ。けがれに、染める世人に、命を与えんために。望みのあしたを迎え、喜びの日を仰ぐ。ああ、たれも、聴け御使いの、歌声。空にわたり、キリスト生まれましぬ。」

永遠にいます主、神のことばが人となった。神の子が生まれた、神の子が生まれた、と繰り返し歌っているのです。それをクリスチャンではない方たちが嬉しそうに歌っているのです。何か不思議な感覚がしました。

・今日、万物を手に保つ者は処女から生まれ、本性の触れることのできない神は地上の者のごとく産着に包まれ、はじめに言をもって天を固くすえられた者は飼葉桶に眠り、荒野において人々にマナを降らせた者は乳房にて養われ、教会の花婿は占星術の学者を召し、処女の子はその贈り物を受けられます。キリストよ、われらはあなたの降誕に伏拝します。

人間は救いを必要としており、一方神は、死ぬための体を必要としていました。幼いマリアがそのための身体を提供したのです。彼女の中で天と地が、神と人が初めて一体になり、イエス様が生まれました。創られざる方が、創ったものと一体になり、御自分の性質を変えることなく、新しい者となられました。こうしてキリストによって切れていた神と人が一つに結ばれたのです。これが救いの始まりです。新しい歴史の始まりです。私はこれを思うたびに深い感動を覚えます。

②【暗闇の中で輝いている光】

クリスマスというのは「夜の物語」が多いのです。イエス様は夜中に生まれました。東方の博士たちは夜中に星に導かれながら旅をし、イエス様を礼拝するためにやってきました。ヨセフも夜、夢の中で現れた天使のお告げを聞きました。そしてヘロデ王から逃れるために旅をしたのも夜でした。クリスマスがいつも夜の物語が多いのは偶然ではなく、実は深い意味があると思います。ヨハネの福音書にはイエス様の降誕のお話しは出て来ません。しかし、その代わりに1節から5節まで有名な「言」（ギリシャ語でロゴス）が出てきます。「言」と書いて「ことば」と読みます。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。万物は言によってなった。なったもので言によらずになつたものは一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」

この初めというのは、創世記に「初めに神は天地を創造された。」（創世記1:1）と同じ言葉です。万物が創造される前から「言」はおられ、この「言」は神であって、万物はこの「言」によって創造されたというのです。そしてこの「言」は命を持ち、人間を照らす光だったというのです。この「言」とはイエス・キリストのことです。どうして分かるかという14節に「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」と書かれているからです。これが、ヨハネが語るクリスマスの物語なのです。ヨハネは「光は暗闇の中で輝いている。闇はこれに勝たなかった。」（ヨハネ1:5 口語訳）とはいいましたが、キリストは闇に覆われた世界の真っ只中にやってきたのであり、どんなに闇の力が強くても、それに負けることなくその闇の中で輝き、闇の世界にとどまり続けてくださっているということを教えています。闇、悪は光であるキリストに勝てないのです。

●「パウロ」という映画を見ました。その中で福音記者ルカが登場します。牢獄のパウロを何度も訪ねては、パウロの言葉を書き写します。キリストの言葉とそのなされたこと、またパウロの言葉を聞き、使徒言行録を書き、それを何枚も複写しては、町の中に隠れているクリスチャンたちに送り、信仰を守るように励まします。力で復讐をしようとする若者を諫め、愛だけが悪に勝つのだと諭します。ルカによる福音書というのは、ローマ帝国全盛期に、ネロ皇帝によって迫害を受け、教会共同体が亡びそうな時代の真っ只中で書かれ、読まれてきました。クリスマスの物語を教会は、70年前に起きたキリストの誕生をほのぼのと思いだすために聴いたのではなく、迫害という荒波にもまれる中で聴いたのです。70年前も自分たちと同じようにしてイエス様は逃げ、旅をし、迫害されます。しかし必ず復活が待っていることに希望を抱いたのだと思います。この後、ルカは牢獄の指揮官であるローマの守備隊長の娘の病気を癒します。多くの仲間が円形競技場で公開処刑されてゆく中、パウロは斬首刑になります。そしてキリスト教徒たちはローマを後にし、小アジアに逃げて行きます。パウロは若い時に、何も知らないまま多くのキリスト教徒を捕らえ、殺しました。映画では幼い少女も殺したことになっています。パウロが死んだ後天国に昇りますが、そこに自分が殺した少女が笑顔でこちらに走って来て抱きついてくれます。ステファノも笑顔で迎えてくれます。みんな赦してくれています。その場面が最後であってホッとしました。

●内村鑑三が「後世への最大の遺物」という本の中でこんなことを書いています。「この世の中は決して悪魔が支配する世の中ではなく、神が支配する世界であることを信じ、それを信じ抜く生涯。失望の世ではなくて、希望の世の中であることを信じ抜く生涯。悲惨な世の中ではなくて、歓喜と喜びの世であるという考えを実行し、その生涯を、この世への贈り物としてこの世を去って行く生涯。」

③【この世に輝くイエスという光に導かれて歩こう】

私がこの教会に来た時、現実には廃墟でした。人もいない、お金もない、何もできない。この世的に見たら、お先真っ暗です。敗北であり、マイナスであり、賢い人なら諦めて見捨てるでしょう。しかし主はここを愛しなさいといわれ、ここに集まる人を愛しなさいと言われました。キリストは「神の国はここにある」、「ここが私の体だ」、「ここに私はいる」といいました。だから現実がどのような困難があっても、それを愛するのです。そこにとどまり祈るのです。そうすれば闇は光に変わってゆきます。光のキリストが闇の中に共にいるからです。人々のために祈るのです。ひたすら祈り、命の続く限り祈るのです。失敗を赦し、裏切りを赦し、罪を赦し、取り成すのです。人の弱さを責めず、嘆かず、祈るのです。悪に善で返すのです。キリストのように生きるために私たちは召されたのです。

「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。見

よ、闇は地を覆い、暗黒が国々を包んでいる。しかしあなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる。」(イザヤ 60 : 1~2) 主が私を照らして下さっています。信仰に起き上がって闇の中でキリストの光を輝かしましょう。